



撰  
德  
目  
志  
後  
記  
卷  
之  
一

リ 5  
4888





95  
4888

概乃落葉續日本後紀歌考序

幸魂遊日たみまゆたまのちのちの道のみみ  
くちくちの福あーくたのるまのちのちの月  
まのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
吾概の大人いふあーくたのちのちのちのち  
よく見をくちのちのちのちのちのちのちのち  
れくちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
くのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
万葉集れ考をそのちのちのちのちのちのちのち

法五味均平蔵

3



櫛の落葉はらふ書うまは免あふ中に  
の續日本後紀乃よおれ考を伊豫の國人  
岡秀孀之需ふよつて道おくまをな  
彼人の書れらるるは夫人の書けり  
しめてこそ板まらむかたのよまなむ  
うたはせむかたふも一首たのまのう  
にまゝの白雲はくもまよあしあふん  
う紙きたる籠のふひるく十段あら  
とほらうらうらうら返回もなくあや

ましむらうらうらあひたれよらあふたのま  
まもだらねのまてあふらあふん  
いよまあふらねのまのまへあふ  
日れ魂のまらうらあふらあふ  
大人うまらうらあふらあふ  
よあふらうの書れらるるはあふ  
あひまらうらあふらあふ  
あふらあふらうのまのまへあふ  
あふらあふらうのまのまへあふ  
あふらあふらうのまのまへあふ



なまむらやなまむらふ似しきともかたむら  
いふも。實政の三と勢とつふきのむ月。信濃  
乃五人永井幸直

宮内省大内省素文信書

楓乃落葉

續日本後紀第十九

嘉祥二年三月

天皇仁明天皇の四十算を賀奉ホキり。興福寺の僧

徒如奉進る長孫也。志ひていよしをうつる  
るまのよし。いよしをうつるまのよし。も  
おほく。それもおみか。まのよし。伊豫の國人  
田内秀真ホツマが承りし。中つち。あつ  
がよみをつけり。かみ。そのよし。をもホキておく  
れふ。その考。





今井似閑といふ人の著る。萬葉緯と云ふもの。此等  
のよみわりとて。あき考もむべきを。己いまそそ  
の書をとらん。彼書をとらん。己うふのみと  
合して。己が誤きらん。はなほしてよ。

庚申興福寺大法師等為奉賀天皇

寶算満于四十奉造聖像卅軀今本卅とあり

寫金剛壽命陀羅尼經卅卷今本あり

卅語即轉讀四萬八千卷竟更作天人

不拾芥子今本子の字を脱せり。類聚國史よりて補へり。天衣羅

拂石翻今本天女羅とあり。類聚國史天衣羅とあり。今ハ國史は後へて。擎御藥

俱來祇候及浦嶋子暫昇雲漢而得  
長生吉野女眇通上天而來且去等  
像副之長歌奉獻其長歌詞曰。

日本乃。あを倭といはん祭語あり。日の神はあま  
ま〜〜まらふ意よていへるるべし。萬葉

三卷富士山の影よ日本之山跡國乃鎮十方

座祇可聞イニスカミカモ云とんえて。それが外は入んば。あのを  
ハ赤人の影よあらひて。左註よ。高橋連蟲麻呂之  
歌集よ出とられハ。神龜のや〜乃乃とん

再考よ。あの祭  
儀も即日出處  
天子との縁  
さして。東方の  
まを。日の本  
といへるあまへ



本唐長國  
号考まわれば  
あの考と同じ  
き説わればハ  
まだ一ささる  
の考までまよ  
いわぬやと  
云へて。

れど。あの詞をきくありて古よりいへる言をさへ。かくりよ  
おハ。飛鳥トトリのあすらりよミコトハ祭儀乃ミコトハあるくよりあてて即オヤカテ  
飛鳥の字をあまうやよみ。あミコトハの後語ミコトハはき。師説ミコトハはう  
けかこし。已考あり。萬  
葉考よ。春日ハルニのかまぐちよミコトハ後語ありてやがて春日  
乃字をかまぐちよむと同一例して。あの辞のふるく  
よりいへるやよみて。後日本ミコトハの字をやまよは後  
一ミコトハ改へ。さてから西へのゆえあひよも。倭の字を改  
めて。あの日本の字をかへらきし。推古天皇の御  
時。日出處の天子とのあひつゝあきされし。さよハ  
かかひれ。終日本ミコトハの字を改られぬ。野馬

臺 乃 國

遠。

師説ミコトハはやまやハもと一西の号よりお  
て。大御オホミコのオホミコ大号とあれりといふハ  
さる事也。されどあの大号オホミコをさるも。いと往古イニハより  
の事とんえて。崇神紀の歌よ。椰磨ヤマト等那須ナス於朋  
望能農之能モノヌシノ云々とあるハ。大御オホミコを造りあひ  
大物オホモノ立ちよオホモノなり。又景行天皇の御時。西國の  
八十集帥ヤソクサツ。日本武尊の御名をなりし。大  
御オホミコよその武きをせむるとんえたり。それが後  
ハ。仁徳天皇の大御オホミコ哥カよ。あきづしま。やまとの由に。  
鴈子産カニコ。汝ニ全聞  
かつあひと。なハきまわ。とあるを。古事記コトワザハ。姫嶋



までの事と。日本紀は。河内國茨田堤までの事と  
 せり。いつまよまれ。大和國內の事あり。大和國の  
 大和と。一てのあり。事あり。さて一玉の名も。  
 大御命の大和。そよより倭の字を書きわける。聖  
 武天皇の御時。大養徳と改らまざる。まことと  
 の大倭よ及され。まこと大の字を添ふる。よ  
 たり。本居宣長が國号考は詳あり。今野馬臺  
 とある。後漢書なる。耶馬臺とあるより。僧  
 家の漫よ出たるのあり。○夜麻登の玉号と。師の  
 考。山門の玉たるより。いれ。本居宣長が國号

考真竊は  
 考る。饒速  
 命。命。命。命。  
 倭洲。倭  
 見津夜麻登  
 の國。日本紀  
 武の巻。武  
 此命倭洲  
 倭。倭。倭。  
 屋見立國  
 の倭。倭。倭。  
 起まる。起  
 屋見立あり。  
 古事記。古

考も。山處のよ。まこと山の富ち。義ある  
 べき。まこと。まこと。まこと。今考ふる。夜麻  
 登。家庭處の畧。か。か。應神  
 天皇の大。山城の國。葛野を望ま。知婆  
 能。加豆怒表美禮婆。毛。毛。知陀流。夜。波。母。美  
 由。よ。み。ま。夜。迹。波。家。庭。ま。家。る。ま。平。系  
 地。の。お。ほ。ら。と。や。め。ま。せ。か。御。也。海。庭。と。り。海上  
 の。大。虚。あり。倭。の。玉。城。ん。そ。か。ん。て。天。降。ま。し。ま  
 あり。し。と。師。の。冠。辞。考。ふ。り。る。も。あ。る。應。神。天



のみえら  
と見立ハる  
及見立と  
ありては  
神の玉あり  
す。見と  
立とも  
葉玉巻ふ我  
大王の見ふ  
芳野の宮と  
いひ。同卷  
物ありま立  
須ら。夕か  
り。ま他田  
須ら。まど  
いへる。お  
め。お。ひ  
あれ。ま。伊  
井諾命。浦安  
國云との。お  
大己貴命。玉  
櫛内國との

皇の葛野を見さけて清よみまゝ大津野の意と同  
しく。大津より望まして。高垣山おとれる。家庭の  
あつちほりて。倭よハ降てまほり。さへ  
庭のよを器て。むとよハ音使の例あり。その湯と  
麻とハ。常と通ふ云ふれば。倭人家庭處なるを考  
べ。處をことのよハ。藤新彼新  
伏所を。あまの例あり。 狩く。くハ萬葉  
考の別記あり。 賀美呂伎能。かみろぎハ。神  
彼よはきてん。祖と。古言  
あり。お雲、國造が神賀の詞。加夫呂伎熊野大  
神と。は。まきのを。命を。大後の辞。神

あひ。か。よ  
つき。も。か。の  
き。の。つ。の。考  
あり。あ。と。も  
と。れ。が。今。も  
か。い。ぬ。

加ハ清音小  
て。か。る。お  
よ。海。子。例。あ  
り。

漏伎神漏彌命とハ。高皇產命と天照大御神  
と。言あり。須賣呂伎とよハ。皇祖を。する。なる  
と。類語なり。おの事萬葉  
考よ。あ。く。い。つ。り。  
宿那毗古那。加。大  
命。少彦名命。二柱の神の。お乃玉を造。ま。し。り。  
古事記日本紀よ。ん。え。を。と。今。も。大汝命を。ん。ぶ。と。  
て。い。ハ。ハ。ハ。ヤ。ア。シ。ス。ゲ。遠。ウ。エ。オ。フ。志。津。大。津。玉。を。葦  
あ。あ。あ。よ。や。系。の。中。國。と  
り。お。と。ま。し。お。と。あ。よ。二。柱。の。神。の。國。造。を。あ。ひ。し。り。  
國。の。え。た。て。葦。管。を。し。も。殖。生。し。あ。ひ。し。り。あ。傳



へのまらなるべし。葦ハかからば海遠く生て。根  
 延ふまのるれば。國造より殖多ひしちふ傳へのある  
 ちのびべし。又菅も。萬葉十四卷よ。美奈刀能  
 也。安之我奈加奈流。多麻古須氣とよみ。まこ  
 湖。核延小菅などよみて。葦とむつあよ生れ  
 まのるれば。あれしも殖遠へまらなるべし。わけてやゆ。  
 國固米。造與理。神代又玉造つまきしん  
 時よりりふ言。らんハある  
 らん。の畧記あり。瀧津波。を山といん  
 やし師のりふ。料のまらなるべし。

起津。毎年。起る下の表ハあれどしよ句よ  
 の字ハ。萬葉十九卷。家持卿の哥よ。毎年  
 謂之登之乃波。やし。禮。春波有度。  
 今年之春波。天皇四十算又満。每物尔。  
 滋榮。豆。志ありハ盛あるをいふ。萬葉十九卷よ。  
 藤波の。志ありハ色ぬとわるハ。盛るこ  
 ろとつるなり。今なほ信濃の方言よ。まの盛あると。  
 後るといへ。榮豆の豆と。今ハ惠は誤まり。類聚



國史よよ アメツチ 天地乃 カミ 神毛 ヨコ 悦比 ビ。 モツ 神玉の  
アテ改つ。

喜を神玉と悦めよとあり。おの悦とよハ。拙くす  
ゆれバ。ういおひとよむべきよとあり。下は神毛  
順比とあるハ。かちらずうづあひとよむハ。 ウミヤ 海山毛  
おハ字のまよよみつ。後世の詞づみの劣まじ。

チ 千世聲變 ヨヒ 志 カハ。 オホキウミ 神代紀。 トドロニカヨミヤマラカ 溟渤以之鼓蕩山岳  
ナリホエキ 為之鳴响とあるハ。素盞鳴命の

おまじひよよりて志う何りしと。今をこれとは表裏  
よて。大治世をきよよりて。海山も千とを喚か

再考する花  
の辨をわす  
くといふ。

ウメヤナギ 梅柳 ツ子 常 ヨ 興 コト 殊 ニ 尔。 シキサカエ 敷榮。 エ 敷ハ假字 ヒラキ 咲 ヒ 万 テ 開 天

すといへり。今本千世を色と誤り。海山も色と誤  
かえらざるとよみたり。山よハ色といひ。海よハ聲と云  
べられバ。理ありしハもわらぬ。さらばかえらばと  
よむべきを。變志と出た心や。まゝ色聲云々と  
よみよばつべきも。おまじひは拙く改められバ。熟考する。  
色ハ千世を誤しとのあり。聲をよびとよむハ。萬葉  
ニ。水手乃聲喚オトとわれバ。即聲の字をよびとよ  
むべき理あり。變志も訓を假しのみよし。交カハあり。



古言あり  
 福とてち  
 望くことよ  
 むらり印あ  
 一柳の葉  
 此の葉おと  
 うめの花の  
 さくを合え  
 忍まひむら  
 くとつとて

忍まひハむのむきかふるをり。萬葉五卷。忍ま  
 八眉のき。望むの。うつほひよりなりなどよみて。美人の  
 紅顔を花よそとく。の笑る  
 を開かふ花よそとく。鶯毛。聲改豆。雪  
 等も。いつのせりありハヤチ。奇事波。すく  
 海より吹たさあとし。八千種ル。奇事波。すく  
 一ハ萬葉十八卷七夕の奇。あや久須志美。同  
 十九卷處女墓の奇。あや一ハ。あやあることこの。  
 久須婆之伎。あやいひ継。云とあや。皆奇なる事  
 といへ。日本紀の邪。少彦名命をく一の神

といふも。奇之神あるべし。あまらるを合を考ふべし。  
 今もらるる不思議のあやとまきりるまをたと。あき  
 せあり。さてあくの波の助辞。下の  
 五ハの妻よあやとらるといふ句よかま。茜刺。日よ  
 祭者なり。師の冠辞考よあ。茜佐須と。天照  
 わるまを刺。志といふ。後世の云葉はうひなり。  
 國乃。日宮能。あのをを考ふる。神代紀。伊  
 辨諾尊登天報命仍留宅於日  
 之少宮矣とある。天上の宮をりやうると。今も  
 迹々藝命のあよふ天降りまして。天下志路



めは宮を。國の日如まとはいふや。まは玉ちよま  
のおふふ阿く。意達<sup>ヨシ</sup>がまきい。後世のまゆ急<sup>ヨシ</sup>や。又  
按るよ。天照大御神の言天原<sup>アマハラ</sup>ルして。中<sup>ナカ</sup>國を奪と  
ちんとのあひーまよれが。天照國と。高天原を  
いへはよわ。つづれよまね。聖<sup>ヒシリノ</sup>之御子<sup>ミコ</sup>曾<sup>ソ</sup>。  
後世のまの劣<sup>ヒシリノ</sup>まるまへ。よまね王  
どもをよまなると。その字<sup>ヒシリ</sup>紙<sup>シ</sup>かり。ひドマとよむを。  
日知<sup>ヒシリ</sup>のまよて。日嗣<sup>ヒシリ</sup>志<sup>シ</sup>ろーめは天皇とせまなり  
と師<sup>ヒシリ</sup>のまよて。あま迹<sup>ヒシリ</sup>々<sup>シ</sup>藝<sup>シ</sup>命<sup>シ</sup>とせはなり。僧家  
のま。いさく古<sup>ヒシリ</sup>意<sup>シ</sup>よ遠<sup>シ</sup>へる。曾<sup>ヒシリ</sup>の助<sup>シ</sup>辞<sup>シ</sup>もいまぞ

や。必能<sup>ヒシリ</sup>とある。瓜<sup>ヒシリ</sup>葛<sup>シ</sup>。あの二字をむさかごとよむ  
危<sup>ヒシリ</sup>きまのろあり。ハ。荷田東満<sup>ヒシリ</sup>のよみあり。  
師<sup>ヒシリ</sup>の冠<sup>シ</sup>辞<sup>シ</sup>考<sup>シ</sup>よんまをり。さてあの字<sup>ヒシリ</sup>よありて。むさ  
か。ハ瓠<sup>ヒシリ</sup>形<sup>シ</sup>ありと師<sup>ヒシリ</sup>のいされーハ。いさくひがまあり。  
天<sup>ヒシリ</sup>の形<sup>シ</sup>ハ丸<sup>シ</sup>らるるまのまや。虚<sup>ヒシリ</sup>ろあるもれまや。人<sup>ヒシリ</sup>ちよ  
まのいさく知<sup>シ</sup>ん。あま漢<sup>ヒシリ</sup>土<sup>シ</sup>人の虚<sup>ヒシリ</sup>言<sup>シ</sup>をうけあ  
るまや。いといぬーまね。漢<sup>ヒシリ</sup>籍<sup>シ</sup>禮<sup>シ</sup>記<sup>シ</sup>をまへむれ  
まのいさく清<sup>シ</sup>まなり。今<sup>ヒシリ</sup>考<sup>シ</sup>るま。父<sup>ヒシリ</sup>方<sup>シ</sup>ハ。日<sup>ヒシリ</sup>刺<sup>シ</sup>方<sup>シ</sup>あり  
べー。刺<sup>ヒシリ</sup>とまとのいさハ。さ清<sup>シ</sup>る月<sup>シ</sup>。まのまをどいさハ。刺<sup>ヒシリ</sup>  
人<sup>ヒシリ</sup>まのいさくといひ。月<sup>ヒシリ</sup>とまるとはまのまをどいさハ。刺<sup>ヒシリ</sup>  
まをまて。まの祭<sup>シ</sup>液<sup>シ</sup>のまのあまぬをーまね。



さて刺とハ。日の御光の天<sup>アマ</sup>よりさしかゞやみ<sup>ミ</sup>をり<sup>ハ</sup>。か  
 方<sup>カ</sup>とハ。彼方<sup>カナタ</sup>をいふ<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>あり。  
打日刺宮ちの祭語也。是と同一く。日の御子のおんさしまたまらねば。  
多神徳のさしかゞやみにて。打日刺とハ。かくて天ちふ云れ  
いへる。打ハ麗あるより。師のしるす。  
まを考ふるふ。上邊あり。うはをいふてある。いとよりふふ。  
べとめハ常通云。  
 萬葉五卷<sup>ミ</sup>。巻<sup>マ</sup>小<sup>コ</sup>。嬰兒<sup>ミドリコ</sup>を失<sup>シ</sup>へ<sup>ル</sup>系<sup>ケ</sup>邪<sup>ヤ</sup>。和<sup>ニ</sup>け<sup>テ</sup>建<sup>タ</sup>。乃<sup>ハ</sup>ゆ  
 き<sup>キ</sup>志<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>敝<sup>ベ</sup>。まひ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>せん。志<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>敝<sup>ベ</sup>の使<sup>ツカヒ</sup>お<sup>ハ</sup>び<sup>ク</sup>く<sup>ハ</sup>ほ<sup>ラ</sup>せ<sup>ト</sup>  
 わ<sup>レ</sup>れ。志<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>敝<sup>ベ</sup>ハ下<sup>シタ</sup>邊<sup>ベ</sup>よ<sup>テ</sup>。黄泉<sup>ヨモツグニ</sup>をい<sup>ハ</sup>へ<sup>ル</sup>。あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>び<sup>ハ</sup>へ  
 て。天<sup>アマ</sup>ハ上<sup>ウハ</sup>邊<sup>ベ</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>知<sup>ル</sup>。黄泉<sup>ヨモツグニ</sup>を<sup>シ</sup>下<sup>シタ</sup>邊<sup>ベ</sup>と<sup>シ</sup>ふ  
 よ<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>て。日<sup>ヒ</sup>刺<sup>サシ</sup>か<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>方<sup>カタ</sup>の上<sup>ウハ</sup>邊<sup>ベ</sup>と<sup>シ</sup>ふ  
祭語のつけの言をも志<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>敝<sup>ベ</sup>べきあり。  
 天<sup>アマ</sup>能<sup>ノ</sup>梯<sup>ハシ</sup>建<sup>タ</sup>。

フミアユ 美<sup>ミ</sup>。天<sup>アマ</sup>のえ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>。え<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>神<sup>カミ</sup>を<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>あり  
 のえ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>。伊<sup>イ</sup>弉<sup>サ</sup>諾<sup>ダク</sup>命<sup>ノミコト</sup>のえ<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>通<sup>ト</sup>り<sup>ハ</sup>ん<sup>ト</sup>して<sup>ハ</sup>梯<sup>ハシ</sup>作<sup>サ</sup>す  
 立<sup>タ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>。伊<sup>イ</sup>子<sup>コ</sup>坐<sup>マ</sup>間<sup>マ</sup>小<sup>コ</sup>。什<sup>タシ</sup>伏<sup>フ</sup>する<sup>ハ</sup>。彼<sup>カノ</sup>國<sup>クニ</sup>の風<sup>フウ</sup>土<sup>ツチ</sup>  
 記<sup>キ</sup>り<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>。天<sup>アマ</sup>降<sup>コ</sup>利<sup>リ</sup>坐<sup>マ</sup>志<sup>シ</sup>。わ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>。阿<sup>ア</sup>米<sup>メ</sup>於<sup>オ</sup>里<sup>リ</sup>あり。  
えまを。  
志<sup>シ</sup>。米<sup>メ</sup>於<sup>オ</sup>ハ母<sup>ハハ</sup>と約<sup>ヤク</sup>る。  
阿<sup>ア</sup>米<sup>メ</sup>於<sup>オ</sup>里<sup>リ</sup>。萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>中<sup>ナカ</sup>ま<sup>ハ</sup>へ<sup>テ</sup>  
 何<sup>ナニ</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>て。十<sup>ジュウ</sup>九<sup>ク</sup>卷<sup>マキ</sup>家<sup>ケ</sup>持<sup>ヂ</sup>卿<sup>ノミヤ</sup>の邪<sup>ヤ</sup>。い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>  
 くだ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>。あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>。滴<sup>シヅメ</sup>よ  
 大<sup>オホ</sup>八<sup>ヤチ</sup>洲<sup>シマ</sup>。大<sup>オホ</sup>洲<sup>シマ</sup>國<sup>クニ</sup>の<sup>ハ</sup>大<sup>オホ</sup>号<sup>ガウ</sup>あり。伊<sup>イ</sup>邪<sup>ヤ</sup>奈<sup>ナ</sup>伎<sup>キ</sup>命<sup>ノミコト</sup>伊<sup>イ</sup>邪<sup>ヤ</sup>  
 奈<sup>ナ</sup>美<sup>メ</sup>命<sup>ノミコト</sup>。八<sup>ヤチ</sup>洲<sup>シマ</sup>を<sup>ハ</sup>産<sup>ウマ</sup>む<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>あり  
 十



万葉十八卷  
 高御座安  
 麻能日繼登  
 須賣呂伎能  
 可未能美許  
 登能伎已之  
 乎須云

て。大八洲は其号おあねふあり。  
 天日嗣能。もつ  
 古事記日本紀小んえをり。  
 日比

神の治よき<sup>任</sup>のまふく。大御位継<sup>ツギ</sup>まふく<sup>多</sup>をふ  
 高御  
 古言あり。今本。天の字を脱せり。古本よりて補り

座。高御座といふものありて。その飾<sup>ツギ</sup>を振<sup>ツギ</sup>を。延喜  
 式江次第等小んえをり。されどあハをとり

よハあり。今ハ仁明天皇の大御位をきりてせり。  
 萬代鎮。布  
 鎮と結齋の名よて。いふふとよむべし。萬葉十九卷

小四船<sup>ヨシノネ</sup>早還來<sup>ハヤキ</sup>等白香<sup>シラカ</sup>著<sup>ツケ</sup>朕裳<sup>ワガモノ</sup>裙<sup>スリ</sup>尔<sup>ニ</sup>鎮<sup>イハヒテ</sup>而將待<sup>マタナ</sup>とを

鎮<sup>ヨリ</sup>而<sup>ヨリ</sup>也。いふひてとよむべき。同五卷鎮懷石の奇  
 五  
 小。いふひて。いふひあひとあも。ある。えある。

ハ能。人の歡をいくと勢といふあり。ちある。さ  
 ぐあもよえちのとよむべけれど。さしを調<sup>シメ</sup>の

よかぬをまて。よえせとハあみつ。くやくは  
 ハ。歡をいくとせとかがへしるべし。せハ

經<sup>ツギ</sup>の約<sup>ツギ</sup>。春<sup>ハル</sup>尔<sup>ニ</sup>有<sup>アリ</sup>利<sup>リ</sup>。乙皇の四十算<sup>シ</sup>小満<sup>シ</sup>あり  
 云より。まらね。子種<sup>コタ</sup>よめてさきこし

きさりのありや。上のを  
 我國之。聖乃皇波。  
 あり。いひえらめきり。



聖の皇と我オハシメセ尊オハシメセ毛カ御坐カ加カおはし—まはるごと

乙皇とアなれり。御坐オホシメセ加カおはし—まはるごと

畧ハ古言の格あり。或ハ云御坐ハ宣命又大坐坐

とあふよ同—く。下の加も哉の意なりといへり。

日宮乃。天上の日のヒノミヤ聖之御子ヒシリノミコ能ノ迹々藝命ヒシメをヤ

よ—ハ上アノシタふオハシメシ天下オホシメシ御坐テ天テおのむり元降ま

見えあり。天下オホシメシ御坐テ天テおのむり元降ま

をり。御坐ハなほま—御世ミヨ御世ミヨ尔ニ相承アヒツケ

くてもよむべ—。御世ミヨ御世ミヨ尔ニ相承アヒツケ

龍ツギ皇ミ迹々藝命あり更ウケツギ継キ每皇キミゴト尔ニ世々の天

なアラヒト現人神止ナリタミ成給ナリタミ雄畧紀曰天皇射獵於

於。現人神止ナリタミ成給ナリタミ雄畧紀曰天皇射獵於

曰何處公也谷曰現人之神先稱王諱ツクシ云云。おの現

人之神ハ乙皇とさ—てヤせふ云ありと。新紀といへり。

續日本紀の宣命。現御神止アラヒト天八洲所知と云も。國

造カムオキが神賀の詞。明御神アラヒト云とあはれも。あ—みうことよ

みて。あれも同言あり。萬葉六卷。住吉の荒大神とあるハ。

よありて。荒ハ畧の誤。人ハ大の誤なりと知へし。天皇ハは世々現りま出ませる人よ—



て。いづき御稜威のおはしまりて。神もえりませばかく  
 ハヤをふし。さて神ちよ云。ふさく説あれど。すべてよか  
 らん。神ハかゝるみ恐るゑとんえて。須佐之男命ハ。  
 大蛇よむひまりて。汝可畏神也とのみい。欽明紀  
 二ハ。虎をさししても。狼をさしても。威神也といひ。萬  
 葉十六卷よハ。かろゆの。虎よ神といひ。まらう詞よ  
 ハ。狼の身を大口の真神が系とつけらる。あれらとを  
 しわざして。神ちよ意をいへ。命とてける神もたの意。ち  
 らわゆる神代といふ祭語も。成給也。大波の詞よ。御坐  
 成出留天益人云とる威又同じく。生の意也。波。  
 波。

たつまでハも皇のくまいづき御稜威をやりヨモノクニ。  
 おこまりて。も下ある一ツとぞく。四方之國

隣皇波。四方國ハ。毛地のるむら小國といひ。隣皇  
 とハ。それが中ふ。かろ玉王といふ也。

皇と一もいへるハ。傍家の漢土百嗣。百嗣ハ。モ、ツギニ  
 一つらる私伝なり。百嗣ハ。ツグトイフ。止。

かろゆ。号卑のよをえち。勢あはるの王とあり  
 て。その位を奪ひ。その國をなまは。いづて百継つづく  
 予れ。何加。等久有。年。いとまくもかゝる意。  
 わん。何加。等久有。年。いとまくもかゝる意。  
 天照大御神の御



秀真竊考  
る小助辞は  
て左倍の力を  
よく見せし  
ぬの左倍の  
助辞は神の順  
ひかひのまは  
まて順ひ敬ひ  
あふと心を入

てるべし凡  
て左倍の助辞  
ハ俗言の造と  
因りくおま  
ありてハ浅く  
用らるるあり  
あハ海一ま  
ををよくわ  
きくめられが  
そを通りが  
き

あさしのまふく。毛地ときたまりあく毛下ありうん  
吾天皇ハ。いづいともまきこあきかろ國王とむしかん。

其所以<sup>ソコユエ</sup>尔<sup>ニ</sup>。今本其の字を脱せり。古言の例と。下  
小の云れおる。一本其の字をふ

うりて<sup>カミモウチ</sup>神<sup>カミ</sup>毛<sup>モ</sup>順<sup>ウチ</sup>比<sup>ヒ</sup>。うづあひハ。顯<sup>ウツ</sup>うたをけませる  
補<sup>ウツ</sup>了<sup>ウツ</sup>。

しんえ<sup>ホトケサ</sup>佛<sup>ホトケ</sup>倍<sup>サ</sup>敬<sup>サ</sup>給<sup>タマフ</sup>布<sup>フ</sup>。仏さの。左倍の助辞ハモ  
をり。

もろづあひもろうへ。仏まごも天皇  
と敬あふといへば古まあり。

益<sup>マス</sup>々<sup>ス</sup>尔<sup>ニ</sup>。世<sup>ヨ</sup>は  
毛<sup>モ</sup>皇<sup>ミコ</sup>も

いやまありあふ<sup>イワカキミ</sup>今<sup>イ</sup>我<sup>ワ</sup>帝<sup>カミ</sup>波<sup>ハ</sup>。帝の字ハあふみる  
わをせり。

御門をきいてあつまなれば。あふ<sup>イシ</sup>へ<sup>ヘ</sup>  
かならず。故きみとをよみつ。下倣之。<sup>ムカシ</sup>往<sup>ムカシ</sup>古<sup>ムカシ</sup>尔<sup>ニ</sup>。

不<sup>オハシ</sup>御<sup>マ</sup>坐<sup>サ</sup>志<sup>シ</sup>。往<sup>ムカシ</sup>古<sup>ムカシ</sup>の二字むうとよまハ句調もよ  
オホミシマサジ けれど。将来の二字よむうへるふ。

いよへとよむへくあやゆ也。今本古の<sup>コムヨニ</sup>将来<sup>モ</sup>毛<sup>モ</sup>。  
字を脱せり。類聚國史ふよりて補へり。

何<sup>イカニ</sup>申<sup>シ</sup>牟<sup>ム</sup>。後<sup>ノチ</sup>の世<sup>ヨ</sup>もいふ<sup>コト</sup>小<sup>コ</sup>。釋<sup>サカ</sup>迦<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>法<sup>リ</sup>。弘<sup>ヒロ</sup>米<sup>メ</sup>



給<sup>タミヒ</sup>互<sup>テ</sup> 仏法に歸依しあをよきなりハヤ 家<sup>イハ</sup>  
せり。給互の互。類聚國史小比<sup>ニ</sup>為まり。

出<sup>デ</sup>之人<sup>ヒト</sup>。家を出て 仏法修行する人をいふ。萬  
葉十三卷小。世間<sup>ヨリナカ</sup>をう<sup>レ</sup>とをひて。家<sup>イハ</sup>

出<sup>デ</sup>せば。又身や何ふうかへ 法<sup>ノリ</sup>之<sup>ノ</sup>旗<sup>ヤカラ</sup> 乎<sup>ヲ</sup>。仏法に入る  
てなるとよみまじり。 徒<sup>トモカラ</sup>をいふ。

旗<sup>ハ</sup>を即<sup>ニ</sup>もが<sup>ル</sup>ともよむべくもやゆれど。さてハ調  
のよわく給ば。やからともみつ。父度會正身神主の

説<sup>ス</sup>す。兄弟<sup>ハカラ</sup>ハ後<sup>ハカラ</sup>くれ。うごらハ。産<sup>ウミ</sup>くれ。輩<sup>トモカラ</sup>ハ友<sup>トモ</sup>  
こりま。旗<sup>ハ</sup>ハおれ<sup>レ</sup>ことのあひハさるまじ。やハ家<sup>ヤ</sup>もや。

弥<sup>ヤ</sup>や。なほ考べ。あ<sup>レ</sup>も 罪<sup>ツミ</sup>有<sup>ド</sup> 赦<sup>ユル</sup>賜<sup>タミヒ</sup>都<sup>ツ</sup>。答<sup>トガ</sup>  
その堂類をいふ云らり。

有<sup>ド</sup>度<sup>ナタタミヒ</sup>宥<sup>ツ</sup>賜<sup>ツ</sup>都<sup>ツ</sup>。ある大赦の行ま<sup>レ</sup>といふや。僧  
徒<sup>トモ</sup>も罪咎<sup>ツミ</sup>わらんハ。い<sup>ハ</sup>て赦<sup>ユル</sup>し給

リ。法師の云々 无<sup>ム</sup>譬<sup>ヘ</sup>言<sup>ナキ</sup> 伎<sup>キ</sup>。今<sup>イマ</sup>お伎<sup>キ</sup>を波<sup>ハ</sup>誤<sup>ア</sup>ま  
云<sup>コト</sup>。実<sup>マコト</sup>を失<sup>ス</sup>へり。 又。古本よりて改つ。

御<sup>オホミ</sup>惠<sup>メ</sup>能<sup>ノ</sup>。今<sup>イマ</sup>本<sup>ホ</sup>惠<sup>メ</sup>の字<sup>ジ</sup>を 異<sup>イ</sup>廣<sup>ヒロク</sup>文<sup>ク</sup>。御<sup>オホシ</sup>坐<sup>シマ</sup> 波<sup>ハ</sup>世<sup>セ</sup> 徒<sup>ト</sup>  
專<sup>セン</sup>に誤<sup>ア</sup>まり。 ケニ 御<sup>オホミ</sup>坐<sup>シマ</sup> 波<sup>ハ</sup>古<sup>コ</sup>

将<sup>マサ</sup>来<sup>キ</sup>も極<sup>キョク</sup>ふべき云<sup>コト</sup>も 家<sup>イハ</sup>出<sup>デ</sup>之<sup>ノ</sup>人<sup>ヒト</sup>。法<sup>ノリ</sup>旗<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>。  
あき<sup>アキ</sup>淨<sup>ジヨウ</sup>意<sup>イ</sup>と<sup>ト</sup>かめ<sup>カ</sup>せり。



再考のふ塞  
加倍ハセキ  
ハを省ける  
語あり。

御世オホミヨ遠ヲ。今如御世世とあり。類ヲ恒ニ尔ヲ惜シ度ト。月ツキ

のわらうくよ過ス行キを。年トシ月ツキ手テ。堰セ倍カ留トメ天テ。せく  
ふとしみなふとハソコ。

を延ノる。不ス過ゴ天テ。鎮イハム止ト許コ。誓チカ願ヒ。比ヒ。萬マン葉エフ二ニ祈イハ  
云クモあり。

しるむよま。乞コヒナム禱イハかども去サれ。此コノ誓チカ願ヒの  
字ジも。ふハ祿ルキがひと。のこ祿ルキがひと。むムべき。禱イハ申マカ

勢セ。仏ブツふいのり。勢セとつるハ。然シカ禮レ度ド。世ヨ之ノ  
上の古曾コソの助辞テニハをむムべ。毛モ。世ヨ之ノ

理度コトワリト。歡ヨロコビ之ノ。春ハル尔ニ有アリ介ケ。毎ツキ月ツキをせき。そのあかき  
皇ミコの四十算ヨロコビを賀ウガヒなる。何ナニ志シ。帝キミ之ノ御世オホミヨ。萬マン代ト

歡ヨロコビの喜ウレシみ。何ナニ志シ。帝キミ之ノ御世オホミヨ。萬マン代ト  
尔ニ。重カサチ飾カザリ互テ。即ツキあひの紀キ。以ヨリ伊勢國多イセノクニタ

為タシメ護メ國家クニ兼カミ奉ホウ飾カザリ大神オホカミとある飾カザリ。奉ホウ令メ榮エ度ト。  
同ドウく。これ徳トクをか。わ。なるをいふ。奉ホウ令メ榮エ度ト。

為タシメ護メ國家クニ兼カミ奉ホウ飾カザリ大神オホカミとある飾カザリ。奉ホウ令メ榮エ度ト。  
同ドウく。これ徳トクをか。わ。なるをいふ。奉ホウ令メ榮エ度ト。

奉ホウをそく。まつらんとよま。柎ツミ之ノ枝エ乃リ。由ヨシ求モトム禮レ。萬マン  
では。句調クマツを。これ。柎ツミ之ノ枝エ乃リ。由ヨシ求モトム禮レ。萬マン



三卷。仙柘枝歌三首と題して。これ初の哥の左註。或云  
 吉野人味稻與柘枝仙媛歌也。但見柘枝傳無此歌とん  
 えり。今もこれ傳のつぎに味稻といふもあふべ  
 か。福ど。萬葉の哥ふ。おの暮。柘のさえざれ。流き流渡。  
 梁ちうきびて。せらびらも何ん。いみし。梁う川  
 人のなうりせ。此間もあま。柘の枝もとある二  
 首をよみて。凡て考る。む。味稻ちよ人。吉野川  
 梁を歩て鮎とそりてあま。柘の本乃枝は流  
 きて。これ梁よか。拾ひもああり  
 が。う歌を。た女りなりて。味稻と夫妻の誓を

なり。老び死びてか。ひを。ちよ古傳のよけ  
 多なふべ。さてあま。由求禮波といはむ。彼傳  
 よ何ふすれ。を尋おて  
 其のりらと下。挙。類  
 聚國史よ。願成。味稻が仙媛とあひて。長生  
 ちよて改つ。倍。を。仏。今本許を計  
 てあそな。聖而已。驗波。伊萬世。のの聖。天  
 きとる。皇。は  
 何ん。仏法歸依のよき人といひて。きん。仏の  
 護ありて。壽を延多るもあむれ。り。を



其所以。今本其の字を  
脱せり。古本此

一本又其 キミヲイハフ 帝遠鎮 布 爾。驗 シシ 須。陀羅尼 ニ 乃御 ノ

の字也。法。金剛壽命陀 ヨソキキヲ 卅卷 手 寫志 シ 繕倍。卅 今

本卅又誤多有り。古本 ニ 護成須。聖之御像。の

聖も。親言を ヨハシラ 卅軀。奉造 テ 互。 イシハシラ 築柱

再按。萬葉  
三の卷。網  
子調流海  
人乃呼聲  
とよめる。調  
ハハとヨシ。

とよハ。本朝文粹前中書王の文。白檀觀世音ヨ  
菩薩一柱とあり。うつかぬ流よ。仏をいづく柱といへり。卅

之師 ノ 乃。悟開 サトヒヒラ 介 ケ 行布 オコナフ 人遠調 ヒトヲヒトヘ 仏念を 悟得

徳の チ 人 ヲ を イ 擇 ニ 誠 コトヲ 致志 イタシ。 ハハ の ヲ を ワ 了 ス。 ハハ の ヲ を ワ 了 ス。

致齋の致 ヨヨゴツ 四萬 ニ 爾。八千卷添 ヤチマキソヘテ 互。四萬ハ。天皇 の 宝算の教

は ハ 八千 ヲ を レ 四 ノ 教 ト 誓願 ノミチカヒ 奉讀 ヨミタテマツ 利 リ。 ホキ 賀 ノ 意 ヲ 祈 ル 事 ナリ。



壽命經を讀ナリイリ。飾祈イハヒヨラ。鎮申セ。利セ。世ハ。あめ云既オコチ。行留ハ。

此之所為乃態コノレレワガザ乎ヲ。いよよみても此句調のよか

を決て行そ。所為態の三字を志わざとよむべし。さう

むハ。云業も空りて拙く。句調もそのよみ。さて行へ

ふ所為態とは宝算をレワガザ。何イカニシ。天テ。志シ。陳聞ケン。止ト。皇ス。

の大神前カミサキ。いうよしておれり。止ト。皇ス。

陳あらり。トト。止ト。皇ス。

日小か。祭ニシラ。終日ヒルモ。須加スガ。終日ヒルモ。須加スガ。終日ヒルモ。須加スガ。

語既よいつ。終日ヒルモ。須加スガ。終日ヒルモ。須加スガ。終日ヒルモ。須加スガ。

鳥玉トウジユ。狭夜通サヨトホス。鳥玉トウジユ。狭夜通サヨトホス。鳥玉トウジユ。狭夜通サヨトホス。

左。夜通サヨトホス。狭夜通サヨトホス。狭夜通サヨトホス。狭夜通サヨトホス。

右。さ。夜通サヨトホス。狭夜通サヨトホス。狭夜通サヨトホス。狭夜通サヨトホス。

鳥玉の発語  
師説ハありガ  
考の別記  
イマ。



左右手の  
ハ季一く方  
葉考よ  
へて。

後の形。あをせよきんとりはせも即ちあり。  
左右をまてとむハ。真手の字。萬葉二。手も  
諸手も去れりて志あべ。さておれま。遠のてを。  
誰も濁音とのそ中へるハ。深く考へさふなり。必  
清べき流あり。あれのみならん。すて  
清濁する大に論ひあり。別よれ考あり。 時日經

天○ オモルトキニ  
思時 尔○ 時の字今本付は誤まり。タキツ  
類聚國史よりて改り。 北落

湍 乃○ 湍ハ急流のよ一字書よしとむハ落  
湍の二字。意を均てをきり。せとハよこり。 堰

倍毛 賀禰天○ 倍毛の二字今本脱せり。ヨノナカノイ  
類聚國史よりて補へ。 世中乃伊

須加志態 遠○ いまうちよハ。萬葉五卷。虚  
見通倭國者皇神能伊都久志吉

國云とふいつく。と同言あるハ。須と都ハ通ハ  
つぎとすきともいひ。万葉。打日刺ちハ発語を。十三卷  
また。打日津。十四卷。宇知比佐都。さて伊都と  
ハ。大被の詞。伊都乃千別尔。千別五と阿都伊都。まて。

まてハ稜威をいふを。轉してハ。まてハ先あや  
葉とせり。 祝詞。伊賀志御世茂穂ちとふハ。大津  
世をほえ。稲穂をわえとるまて。 伊賀志ハ即







別よあぢど。さきつとよみてハ。下

此國成建天のおとよつぐん。

常世島 蓬萊嶋

冲虚真經曰。渤海之東。不知幾億萬里有大壑焉。實

惟無底之谷。其下無底。名曰歸墟。八紘九野之水。天

漢之流。莫不注之。而無增無減焉。其中有五山焉。一

曰岱輿。二曰員嶠。三曰方壺。四曰瀛洲。五曰蓬萊。

其上禽獸皆純縞珠玕之樹。叢生華實。皆有滋味。食

之皆不老不死。所居之人皆神仙之種。一日一夕。飛

相往來者不可數焉。而五山之根無所連著。常隨潮

波上下。往還不得暫時焉。云五山始峙。而龍伯之國有

大人舉足不盈數步。而暨五山之所。一釣而連六黿。

合員而趣歸。其國灼其骨以數焉。といへり。下は浦島

子の事をもつふも。あれ真經の言よ似つる〜

らん。さて常世らふ云ハ。本居宣長が古事記傳よ三

種よ釈す。おの常世島ハ字の〜。常〜へよかえ

らぬ義もや。まゝに底依よて。をくゆきあるおをい義

よや。ゆ云の

國成建天

いづまの神。誰れ人

の間にらふ由る。皆神人の造ら〜

このあり。あくの云。誠よおちををる。到住美。聞



見人波ミルヒトハ○聞キクとハ。萬葉五卷マンヤクゴクワン。大王オホキミ云クニ企許斯遠キコシスヲ

須久迹スクニ同廿卷ニ。伎已之賣キコシメ須四方乃スヨモノ

久尔クニ云クニとクニ聞キク之ニ。見ミとハ。同六卷ニ。我大王之ワガオホキミノ

見給芳野宮者ミタケフノヨミヤハ云クニとクニ不見也ミヤカシ。云クニもクニ也ニ。又マタ一ヒト乃ノ

志シとクニ久尔クニ云クニとクニ聞キク之ニ。見ミとハ。同六卷ニ。我大王之ワガオホキミノ

志シとクニ久尔クニ云クニとクニ聞キク之ニ。見ミとハ。同六卷ニ。我大王之ワガオホキミノ

志シとクニ久尔クニ云クニとクニ聞キク之ニ。見ミとハ。同六卷ニ。我大王之ワガオホキミノ

來留ケルル○あまきより大津オホツの故事コトをキり。澄江乃スミエノ○

淵フミ釣ツリ志シ○國クニ小澄江コトシのコト乃ノ萬葉九

卷クニ。詠水江浦島子歌ウタ。春日之霞ハルヒノカスミ時尔墨吉之岸トキニスミキノキサ

尔出居而釣船之得乎ニイデテツリフネノトヲ。良布見者古ラフミシヤコ

之事曾所念ノコトソオモホユとクニみクニるハ。攝津國セツの位イ告ツとクニもクニるハ

ふクニちクニり。さて淵フミを瀛ヨシの字ジの得トクや。いつれイツレもクニまクニれクニるハ

とよむべきトヨムベキ。海ウミよクニあクニらクニしクニとクニいクニくクニ



くれど。之の字をしも加へるれば。字を追てきみのきみ  
 とよむより外あり。されハ下の天女よむて。皇朝の氏  
 をいふまよてきみのきみ  
 とよむより外あり。されハ下の天女よむて。皇朝の氏  
 をいふまよてきみのきみ  
 とよむより外あり。されハ下の天女よむて。皇朝の氏  
 をいふまよてきみのきみ

浦島子

加○雄略紀曰。  
 二十二年

秋七月丹波國餘社郡管川人水江浦島子乘船而  
 釣遂得大龜便化爲女於是浦島子感以爲婦相逐  
 入海到蓬萊嶋歷觀衆仙語在別卷と云。  
 天女○風  
 土  
 乃及此のハ。釋紀は所引の風土記は詳し。  
 記の文は。女娘答曰。訛比來。互○訛ハ日本紀は。  
 天上仙家之人也と云。

めり。今俗言ふありらふといふ是也。約諾をいかりと  
 まられきり。萬葉の奇は。海若の。神乃女は。たまさ  
 く。いあき趣て。相訛。あしきく。うはとあり。今本訛を  
 釣と。良比の比を禮と爲す。されど。釣。きまは  
 ちふ云のあはれくも。いふ。必。誤字ありん。と。おとし  
 へ。私考へ改つ。又按。語良比。よも。み。べ。風  
 土記の文は。乘相。紫。雲。泛。引。互○。柳。曳。ハ。た。ら。よ  
 談之愛と見えり。  
 今本。泛。の字を。あ。り。今。本。泛。  
 を。之。よ。誤。まり。類聚國史より。改つ。

片時尔。將飛

日本



往ユキテ天テ○ 萬葉ニ暫時トをコレ是コト曾ゾ此コノ○ 常世トコヨノ之ノ國クニ度ト

語カタ良ラ比ヒ○ 上ト常世ト島シマとワ系ケハ。次ツの句コトは國クニ云クニとツク

といトナナカヘ志シ加カ 萬葉ノ系ケハ。七日ニまで家イへマ。七日ノ經ニ良ラ○ 不來コズ而テといトハ。七日トいハ

いへるハ。いみへかふ云ハ。必七の教をといハ。神功紀  
ニ先日教ニ天皇者ニ誰神也ニ願知ハ其名ニ速于ニ七日七夜ニ  
乃答曰云云とんえ。萬葉十七卷ニ。をくわハ。今ニ  
日たま。遠く河ハ。七日内を云ともあり。加良

ハ。神代紀ニ。雖復イフモ天神何能アツカミトナガモ一夜之間ヒトヨノ今人有振乎カラニヒトラハラセシヤ  
とある。一夜之間をいよのかとよみ。萬葉十八卷  
ニ。あはよりハ。つぎいきあえん。ほろきん比登欲能可ヒトヨノノ  
良ラハ。いひくわらふとわ。あまられか。了同ト。  
カギリナク イチアリ シニ  
無限カ久キ。命イ有チ志シ。此コノ島シマ爾ニ許コ有チ介セ良ラあは  
波ハ。曾ゾ。有チ志シ。天女アマメ

常世國蓬萊島の人として。率て移して住む。  
蓬萊嶋ト云クといハ。今ハ。あは浦ウラ寫シ子コ帰キ  
来キ。日本後紀ニ見レズレ。既ニ萬葉ノ系ケハ。後  
遂ツ尔ニ壽ス死シ氣キ流ル水ミヅ江エ之ノ浦ウラ島シマ子コ之ノ家イヘ地チ見ミとヨクク云ク。



延暦の比佛本記と云ふ偽也。今の後紀ハ偽書なり  
なり。されど其浮説のなるよりして此賀云々の用

三吉野尔。有志熊志禰。既了也  
る萬葉の

註云。味稻とある也。懷風藻紀朝臣男人が詩よも丹墀

真人廣成が詩よも。美稻とあるなり。味も美もうま

よむべきとあり。熊志禰とあるなり。今本熊を熊志誤

言るなり。和名鈔云。糶。和名久。精米所以享神也

とある也。即美稻のさことんそり。今本熊を熊志誤  
す。志禰の禰を脱す。類聚國史と古本より

て補。天女。來通。天。おはる。既よる。ゆ。傳の  
へ。つまら。縁ハ。怒か。い。い。

仙媛と夫妻の契をなせしむ。其後波。蒙譴

萬葉の歌ふて志しれをり。天。作る。物が。り。ふ。あ。ぐ。わ。ひ。め。れ。け。お。あ。り。

わ。ど。天。より。ひ。さ。め。ら。ふ。せ。ん。て。む。う。さ。さ。り。

り。ある。と。や。り。よ。も。先。も。此。由。ふ。ま。り。天。より。れ  
せ。の。を。か。が。り。て。歸。り。往。き。と。い。傳。ち。る。也。一。田。毗

禮衣。著。互。飛。度。云。お。れ。ハ。領。巾。よ。て。女。の  
か。る。る。の。し。の。長。ハ。



延喜縫殿式。領巾四條料紗三丈六尺。別條九尺  
と云。頸ウケシより左右より引られて懸るをれと云。今領巾  
衣といふ。天女の意なるもの。此の制をまひて。領巾を  
かけしより。初オホけさぎらまの多かりと云。わ

是亦。此嶋根乃。人ヒト許コ有アリ度ト云ナ。禮レ○蓬萊

島の人ふるりと云。是島根の根。嶺をいふ。萬葉  
ふ。倭島根とよめる。海路より遠く倭のかを見  
さけていふ。たれば。彼方の山嶺をいふ。さしていふ  
葉あり。同廿卷。いざ子も。そんわがあせそ。そ地のか

を先いふ。倭之麻祢波とあるを。ひろくは。五種イツクナ乃

寶雲タカラクモ波ハ。五色の雲。此コ大悲者ダイヒガ乃ノ。觀音を也。智度論云大

事下よりを待

智度論云大

悲以離苦因縁與衆生。千種チクナ乃御手ノミテ乃千種陀羅

記曰。即發誓言。若我當來。堪能利益安樂一切衆生。

者。今我即時身生。千手千眼具足。發是願。已應時身  
上千手千眼悉皆具足とあり。是も千手といふ。人  
觀音の通名ある事あり。此の言も自ミらる。



乃世遠ヨシヲ○萬代延留マンダイエンリウ○一種遠イツシュ

同經本文曰若為仙道者當於

五色雲手ゴシキクモテ云彼譯小出第廿八手也とわり。觀音の

像。左右二十手づめの多かりて。合掌の多を合して

四十一手。其手おとよ名何ぞ。第廿八手を五色雲手

と云。これ世を萬代延る仙道の名れ一種ぞとて。

これ五色の雲を対文。別コトニ爾カザリテ莊ヨロツク天ヨ萬代ニ爾キミ皇ヲ

別カザ莊ア天カ萬代カ爾ニ皇キ乎ミ

鎮イハ倍ヘ○雲をたぢけ。破の松スハニガタ藤の花咲せ。

拾遺集賀部  
又天曆のみ  
と四十より  
おそい  
山階

考れ轉るる由。轉の舞小形おと造アテ

なり。これよせよあのかぎ云々イソノウヘノ儀上ニ乃ハ緑ニ

乃松波ハ○百種モ、クハノ乃葛カツラ爾コト別ニ爾ニ○松マかカれる藤フジを

らよ別ニ爾フチスナ藤花フチスナ○開榮サキサカ睿エ今イマ本ホ睿利ニを暮ク豆マメ

て改つ。利リハ今イマ本ホ豆マメ。萬代マンダイ爾ニ○皇キミ乎ヲ鎮イハ倍ヘ一ヒト種シュ

のノかカるルるル。鶯波ウハヒスハ○枝エダ爾ニ遊天アソビテ○飛舞トビ豆マメ○轉歌サエツリウタ比ヒ

寺ノ金泥壽  
命經四十卷  
を云傳養  
なりて所卷  
おぼゆるんせ  
てはるはら  
りりり。あの手  
由のしき物。  
わまのあわ  
てよかけるお  
云とんえら。  
開をゆらぐ  
とよむい言  
よわら。



古今美の哥不。百鳥の轉るをくみ。同序不。むら  
驚。水よむむ怪れをむむ。いきこいけるをれ。よきう  
新成よまよざ。ヨゴヨニ。皇乎鎮倍。澤鶴。命乎  
あるとあり。

長美。濱尔出豆。洲演形を造りしり。歡舞  
は一句えあはれり。

豆。滿潮乃。無斷時久。萬代尔。皇  
とせり。

乎。鎮倍。薰修法乃。力乎廣美。薰修法の  
カも。壽命

經四萬八千卷と讀誦し。大悲者乃。護乎厚美。  
新をりし法カ法り。

おれ法カよりて。觀音の。萬代尔。大御世成。  
後も後より厚とひり。

天皇の大御世を。如八十里。城尔芥子拾  
後如し。後とひり。

布。智度論云。如經有比丘向佛言。幾許名劫。佛  
言。我雖能說。汝不能知。當以譬諭。可解有方百  
由旬。城溢滿芥子。有長壽人。過百歲。持一芥子。去芥  
子。都盡。劫猶未盡。云。あれ又百由旬とあるを。今ハ



十里の城と云ふハ。法苑珠林ニあれ劫の予をりし條  
條。若<sup>シ</sup>據<sup>ラ</sup>大劫。即<sup>チ</sup>以<sup>テ</sup>八十由旬城為<sup>シ</sup>量。と云ふ事あり。

天人<sup>アマヒト</sup>波<sup>ハ</sup>。あめむすむのむハ。萬葉十七卷。あまきか  
子。鄙<sup>ヒナ</sup>の都<sup>ミヤコ</sup>。わ免<sup>ヒ</sup>む。かく<sup>ク</sup>慈<sup>ニ</sup>す。バ。

ある事あり。ありとよめ。ハ。帝都を天<sup>アメ</sup>に比<sup>ヒ</sup>て。都人を

天人<sup>アマヒト</sup>と云ふ事あり。今<sup>イマ</sup>ハ正<sup>マサ</sup>しく天上の人を云ふ事あり。

云<sup>ク</sup>右<sup>ミダリ</sup>。擧<sup>タテマ</sup>手<sup>テ</sup>天<sup>アメ</sup>。萬葉六卷。手抱<sup>テウラ</sup>而我<sup>オレ</sup>者<sup>ハ</sup>將<sup>マサ</sup>御<sup>ミ</sup>  
又<sup>マタ</sup>同<sup>ドウ</sup>。在<sup>シ</sup>同十九卷。手拱<sup>テウケ</sup>而事<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>御<sup>ミ</sup>

代<sup>ヨ</sup>云<sup>ク</sup>と。不<sup>フ</sup>拾<sup>シツ</sup>成<sup>セイ</sup>奴<sup>ヌ</sup>。芥子<sup>カイシ</sup>を拾<sup>ヒ</sup>ひおんも。天皇の  
よみたり。大御世<sup>オホミヨ</sup>をなごうわらうと云ふ事あり。

如<sup>ヤ</sup>

八百里<sup>ヤチハチリ</sup>。磐根<sup>イハガネ</sup>乎<sup>カ</sup>。毗禮衣<sup>ヒレゴロモ</sup>。毗<sup>ヒ</sup>今<sup>イマ</sup>本<sup>ホン</sup>毗<sup>ヒ</sup>誤<sup>アヤマ</sup>り。  
衣<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup>ハ。既<sup>スデ</sup>よスソタレト。祖<sup>ソ</sup>庭<sup>テイ</sup>事<sup>ジ</sup>苑<sup>エン</sup>云<sup>ク</sup>樓<sup>ロウ</sup>炭<sup>タン</sup>  
よより。裙<sup>フチ</sup>垂<sup>タレ</sup>飛<sup>ト</sup>波<sup>ハ</sup>。拂<sup>ハラフ</sup>人<sup>ヒト</sup>。經<sup>キヨ</sup>云<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>事<sup>ジ</sup>論<sup>ロン</sup>劫<sup>セツ</sup>有<sup>リ</sup>  
一大石方四十里。百歲<sup>ヒャクサイ</sup>諸<sup>シヨ</sup>天<sup>テン</sup>來<sup>キ</sup>下<sup>カ</sup>。取<sup>ツク</sup>羅<sup>ラ</sup>穀<sup>コク</sup>衣<sup>イ</sup>拂<sup>ハラフ</sup>石<sup>シ</sup>盡<sup>ツク</sup>  
劫<sup>セツ</sup>猶<sup>ナホ</sup>未<sup>ミ</sup>盡<sup>ツク</sup>云<sup>ク</sup>。あはよ八百里の磐根と云ふ。あれも別<sup>マ</sup>り  
り。何<sup>ナニ</sup>も云<sup>ク</sup>べし。不<sup>フ</sup>拂<sup>ハラフ</sup>成<sup>セイ</sup>天<sup>アメ</sup>。あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>磐<sup>イハ</sup>根<sup>ネ</sup>を拂<sup>ハラフ</sup>ひ  
僧<sup>ソウ</sup>家<sup>カ</sup>よるぬべし。乃<sup>ナリ</sup>。皇<sup>ミカド</sup>ハ上<sup>ウヘ</sup>と云<sup>ク</sup>るハ。すく<sup>ス</sup>てま<sup>マ</sup>を  
らどと云<sup>ク</sup>ふ事あり。あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>と云<sup>ク</sup>ふ事あり。

當代<sup>トウダイ</sup>天皇<sup>テンノウ</sup>と  
保<sup>ホ</sup>伎<sup>キ</sup>美<sup>ミ</sup>と  
萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>考<sup>コウ</sup>と



季ヘくハい

みしハ云々。故おほきみとよみたり。萬葉三卷よ。  
皇者神オホキミハ。カニニシニセバ二四座者とあるも。おほきみとよむべきはあり

護之法乃○藥モリノリノ。クシリヲサゲ手敬サゲ手○  
護の法とハ。大悲者の護  
をいひく。あめ草ハ不老

不死モチキ仙サモラフ持來候布○  
芥子拾ふも人も。磐を拂  
ぬ天女も。磐を拂ふは

なりて。御藥を採来さもらさるる。さもらふ。伺居ウカヒヨルと  
ハ。萬葉二卷よ。雖伺侍。三卷ふ。雖侍候。侍候尔

など。集中サモラフヘドいしおほし。雄カクゴト如是○鎮イハ倍コト事ハ者○  
畧紀サモラフ候サモラフ風サモラフともいふなり。留事者○

毎事コトゴトニ○雖劣オトルイヘド劣ハ拙劣の義よ。つやまらぬも  
とよむべくおもほゆまじ。つやまらぬ

そふ云。古云もゆえ。故おほきとよみたり。かくさぬ  
そ賀ホキせせ。毎事コトゴト小つ手あくおほき。為作ワザぞと卑

下してモノ每物非數カズナラ度チ○  
萬葉四卷。倭文手纏數  
カズニアラ

十五卷ふ。ちよひぢれ。加受カズもあらぬ。これゆゑよ。ちよ  
ひハ。人数をぬき。あハ。獻をぬく。おほきもあらぬ

旅人タビヒト尔ニ○宿春日ヤドカスガ奈ナ宿宿とよまてハ。去日ふ  
留イ○かゝるイクラ笈語イクラあり。萬葉



十二卷の吾妹子尔衣

借香之とつけける同

山科ふる一と

元亨釋書より

劣るもの教なるぬものも

仏より此なるものといへる

あより下ハ古語にて

賀の心より一と

佛尔

毛尔

山階乃

佛聖乃

奉

獻

大御世

万代祈

申上

留

留

興福寺を山階寺

此のいふハ初山城

布奈

此

乎

利

利

留

留

上

禮の字をコトノハ

脱せるや

さるハ句調の

るでわかりん

逐の字。今本遂は誤まり

聚國史と古本よりて改つ

良唐をかり玉とよむハ

須藤原朝臣清河と題して

國邊遣とあまハ唐ハかり玉とよむべし

須の字を流るハ行は似れど

波。事之詞の三字を引連

縁ておとのとよむべし

此國乃本詞尔

逐依天

唐乃詞遠不假

賜入唐大使

此吾子乎韓

不假の下ハ良

假字はハか係あき

秀真竊云  
法師云  
かく本を  
すれぬぞ  
らむ



よしもわろふ。カキシルス。ハカセヤトハ。博士不雇須。博士ハひろ  
行ハわろふ。書記。博士不雇須。博士ハひろ  
くまの知

此國乃。云傳。布良。あつめ云ハ句を隔て。  
下ノ古語ハ流傳也。

日本乃。倭之國。波。乃。言靈。乃。  
既出。

當國。萬葉五卷ハ言靈能。佐吉播布云。同十  
三卷ハ事靈所佐國叙云。ハ此外ハ

此御靈のさちを佐まら御流傳と云ふなり。さちを

云れる事ハ轉一用ハハ後あり。さへ當の字ハたす  
る。富の字ハたす。決て誤字ハたす  
富の字ハたす。富の字ハたす。富の字ハたす。  
古語ハ流

來禮。あつめハ。常なきもの。語繼奈我良倍  
カカリヤナガハ

伎多禮。同十八卷。今ノカムコトニ  
神語ハ傳

來留。神語ハ。神代より傳へ。古言をいふ事ハ古  
事記八千矛神の御流傳の末。此謂之神語也



と見え。又續日本紀第廿九云。詔因神語有言大中臣而  
 中臣朝臣清麻呂畧賜姓大中臣朝臣とある神詔ハ大掖  
 の詞をいひ萬葉十九卷ハ住吉ルにつく祝部我神語  
 等云とある神語等ハ祝部ガ申詔刀言をいふる者ハ  
 傳來○事任ツスル○コトノニニ 万ニ 爾○  
 古云も神語もいふるをさや  
 用ひて。これガまゝとあるかき  
 ハヤありと モトツヨノ 乃○ コトタツスレバ 本世乃○ 事尋者○  
 往昔をいふ 歌語○  
 ヨミカヘシ 詠反志 此一句の心得がさふ。熟考まハ歌語  
 天○ハ。形をよむるハあつて。形よむるハ

をいふあり。詠反も。形よむるハあつて。か言まされ。  
 天竺言まされ。佛言ハ譯まるといふ。反ハ。萬葉中  
 一。よみかき文字ハ。假字書小字を加へて。某ハ某の反  
 とある反あり。哥ハ佛の雅言をえらむるものバ。文  
 字音をまづ。ハ漢文辭を用ひ。佛言をい  
 ひて。を。預言よみかき。ハ。古きハ。字  
 音を用ひ。ハ。大慈悲者  
 薰修法とて字音ぬ。まゐるハ。後世の考まゐる。神  
 事コト 爾○ モチヒキタ 禮レ 用來キミコト 皇事ル 爾○ モチヒキタ 用來レ 禮レ 神カミ 祝イハ  
 利○ 詞コト 也ハ。







コトワザゴト 仁○ みの嘖を今本よ、咳は為る。類聚國史

故古本の一不嘖とあるあり。嘖ハ諺又同一ヶ折箸

不知とあり  
よしよめゆ  
ハあるあり

乃○今も箸折の見方 本末不知 ○ 折つた箸を  
本末れなきま

ハ。古語不遵ひく賀言ハヤセども。云葉つゞきもばこ  
る。本末れなきまありき 亂絲乃○ 亂 有 度○  
を卑下してつゝあり。

九重ハ内裡をア云あり。是を古今集此等ハ、あ  
九重乃○ 御垣之下 ○ 尔

世鴈 ○ 率ふふが發語あり。古事記の孫よ。比  
氣登理能。和我比氣伊那婆とあるも率鳥

の率往むとよつづけけて。あれと同一意。 率連 天○ 大  
常世ハ、既よふ底依ふを影魚。

師等抄連きて。 狹牡鹿 乃○ 發語 膝折反 志 萬  
内裡小まあるあり。



三卷<sup>ニ</sup>十六<sup>ニ</sup>自物<sup>ニ</sup>膝<sup>ニ</sup>

折伏<sup>ヲ</sup>とある<sup>ニ</sup>か<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>。

候<sup>キ</sup>

伺ひ<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>より<sup>ニ</sup>キ<sup>ニ</sup>コ<sup>ニ</sup>エ<sup>ニ</sup>ツ<sup>ニ</sup>ラ

聞<sup>キ</sup>曾<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>

須<sup>ス</sup>○聞<sup>キ</sup>ハ<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>聞<sup>キ</sup>あり<sup>ニ</sup>。今<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>聞<sup>キ</sup>を<sup>ニ</sup>開<sup>キ</sup>は<sup>ニ</sup>誤<sup>リ</sup>。久<sup>ク</sup>下<sup>ニ</sup>。曾<sup>ニ</sup>

止<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>シ</sup>ど。止<sup>ノ</sup>字<sup>ハ</sup>類<sup>ニ</sup>聚<sup>ス</sup>國<sup>ノ</sup>史<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>古<sup>ノ</sup>本<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>。

聞<sup>キ</sup>も<sup>ニ</sup>古<sup>ノ</sup>本<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>イ<sup>カ</sup>ル<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>睿<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>の<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>汗<sup>ニ</sup>流<sup>ニ</sup>

より<sup>テ</sup>改<sup>メ</sup>つ<sup>ニ</sup>。何<sup>ニ</sup>爾<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>睿<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>の<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>汗<sup>ニ</sup>流<sup>ニ</sup>

志<sup>○</sup>競<sup>ル</sup>恐<sup>ル</sup>留<sup>○</sup>何<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>睿<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>の<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>汗<sup>ニ</sup>流<sup>ニ</sup>

オ<sup>ガ</sup>カ<sup>シ</sup>ミ<sup>ル</sup>留<sup>○</sup>何<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>睿<sup>ニ</sup>以<sup>キ</sup>聞<sup>キ</sup>の<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>汗<sup>ニ</sup>流<sup>ニ</sup>

あり。

あり。

者<sup>ハ</sup>夫<sup>レ</sup>倭<sup>ノ</sup>歌<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>體<sup>ハ</sup>比<sup>シ</sup>興<sup>ラ</sup>爲<sup>ス</sup>先<sup>ニ</sup>感<sup>ズ</sup>動<sup>ス</sup>人<sup>ノ</sup>情<sup>ヲ</sup>最<sup>モ</sup>在<sup>リ</sup>茲<sup>ニ</sup>矣<sup>。</sup>  
季<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>陵<sup>ニ</sup>遲<sup>ク</sup>斯<sup>ノ</sup>道<sup>ハ</sup>己<sup>ニ</sup>墜<sup>リ</sup>今<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>僧<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>頗<sup>ニ</sup>存<sup>ス</sup>古<sup>ノ</sup>語<sup>ハ</sup>可<sup>シ</sup>謂<sup>フ</sup>  
禮<sup>ノ</sup>失<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>求<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>野<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>採<sup>リ</sup>而<sup>テ</sup>載<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>云<sup>。</sup>

あ<sup>の</sup>を<sup>を</sup>え<sup>ん</sup>ふ<sup>く</sup>は<sup>く</sup>は<sup>津</sup>時<sup>古</sup>の<sup>を</sup>廢<sup>す</sup>  
て<sup>あ</sup>れ<sup>ん</sup>り<sup>は</sup>を<sup>を</sup>し<sup>も</sup>う<sup>て</sup>を<sup>記</sup>す<sup>の</sup>と<sup>して</sup>  
史<sup>ニ</sup>載<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>。さ<sup>ふ</sup>を<sup>千</sup>載<sup>す</sup>下<sup>して</sup>。こ<sup>の</sup>  
學<sup>ノ</sup>の<sup>み</sup>き<sup>あり</sup>は<sup>起</sup>り<sup>て</sup>を<sup>記</sup>す<sup>し</sup>古<sup>ノ</sup>語<sup>ハ</sup>  
み<sup>古</sup>神<sup>れ</sup>る<sup>も</sup>カ<sup>キ</sup>。他<sup>ノ</sup>傳<sup>ト</sup>の<sup>り</sup>を<sup>す</sup>か<sup>ふ</sup>も<sup>の</sup>志<sup>ス</sup>  
ぬ<sup>え</sup>好<sup>ん</sup>ま<sup>す</sup>も<sup>古</sup>き<sup>を</sup>も<sup>の</sup>取<sup>あ</sup>つ<sup>か</sup>  
ふ<sup>り</sup>は<sup>ぬ</sup>る<sup>也</sup>。漢<sup>ニ</sup>加<sup>へ</sup>縣<sup>主</sup>の<sup>切</sup>り<sup>を</sup>も<sup>わ</sup>る<sup>。</sup>















おもしろくは書ける。あまのこが古学を心得る  
たはてはゆわく福だなり。かまかよも。かこしげかく  
まへも。加茂の君の御書あり。此君のふみ  
か初めあひよ。道のまよ。よつ御代までゆき  
えが隈々あきらめあひる。我大人業本回神なる。誰  
誰も今よりさうはがう。いよ。人をあそぶ。皇  
皇國の學なる。すまほなる。云々。皇の松山  
君。皇の學なる。かくいふ。伊豫の松山  
ある回内秀真。おのふみ。あひ失る。わ  
わ。扱よ。寛政三年

八月たるとり。

伊豫國人 田内秀真發行

宇治五十槻大人著

萬葉考槻能落葉 三之卷考 別記添

近刻

寛政六甲寅五月

大坂博労町佐野屋橋筋 播磨屋新兵衛



